

# 長安西明寺の学問と上代漢詩文

——大安寺文化圏の出典体系——

## 藏 中 し の ぶ

### 一 出典論から知的体系へ

上代における比較文学研究は、昭和三十年代なかばに相次いで出版された、小島憲之氏の『上代日本文学と中国文学』における出典論・源泉論<sup>1)</sup>と、中西進氏の『万葉集の比較文学的研究』における主題論<sup>2)</sup>とが、ふたつの大きな潮流を形成し、基本的な方法論として展開してきた。<sup>3)</sup>

小島氏は『懐風藻』の道慈の詩序の出典として、唐・道宣撰『続高僧伝』を指摘し、つぎのように述べられた。

実はわたくしは『続高僧伝』の投影した『懐風藻』にみえる仏典語の一、二を示すのが目的であつて、ひろくいえば、上代における詩文―仏教関係の文献を除く―にみえる仏典語を探そうとしたわけである。しかもその中の仏家伝群の中に、『続高僧伝』にみえる語句、

主として仏典語がゆきわたっている事實は、『懐風藻』の成立過程における「仏家伝」、その成書か否かは不明にしても、その存在をある程度想定することもできよう。これは不測のさいわいであつた。「仏家伝」をまとめた上代人某は、『続高僧伝』のほかに、同じたぐいの高僧伝を繙いたことは当然といえよう。

小島氏は『続高僧伝』の投影した『懐風藻』にみえる仏典語の一、二を示すことを目的とし、こうして得られた出典語を手がかりとして、『懐風藻』の成立過程における「仏家伝」という出典となるある特定の書物の影響を想定されたのである。

しかしながら、出典語を調べてゆけばゆくほどに、ひとつの漢語の典拠がある一冊の書物に特定できないというケースに、しばしば突きあたる。小島氏が『続高僧伝』の

ほかに、同じたぐいの高僧伝」の存在を想定されたように、同じ出典語をもつ書物群が顕著に存在するのが、上代の仏教的な漢詩文の特徴である。

こうした「同じたぐいの高僧伝」を出典にもつ例が、表1である。

淡海三船撰「初めて大和尚に謁す」の詩序は、『唐大和上東征伝』『延暦僧録』に収録され、「序」「詩」のいずれにも、『撰摩騰』『康僧会』というふたりの中国高僧の名が引用される。

その出典のひとつに、玄奘撰「新訳経論等を進るの表」がある。この上表文は、玄奘の伝のなかでも、最も詳細にして最古に属する『大唐大慈恩寺三藏法師伝』（以下、『慈恩伝』と略称）に引用される。いまひとつに、唐の冥祥撰『大唐故三藏玄奘法師行状』（以下、『行状』と略称）巻末の「誄」がある。『行状』もまた、『慈恩伝』とともに玄奘の伝記のなかでは最も早く成立したものである。おそらく、唐では玄奘撰「新訳経論等を進るの表」を踏襲して、『行

状』の「誄」が製作されたものとみてよい。

では、日本で淡海三船はどちらの文献によってこの詩序を述作したのか。いずれが淡海三船の詩序の出典と認定しうるのか。

この場合、出典をいづれかに特定することは困難といわざるをえない。この上表文を収録する『慈恩伝』と、「誄」を掲載する『行状』が出典語を共有し、しかも両者の成立時期がきわめて近接しているからである。したがって、ふたつの出典がいずれも玄奘に関係するという意味で、「同じたぐいの高僧伝である」ということを確認するにとどまらざるをえない。

表2も、同じ出典語をもつ文献が複数存在する例である。光明皇太后の『国家珍宝帳』願文と、玄奘撰『西域記』を進るの表』に「流沙」「滄海」の語がみえ、また、淡海三船の『大安寺碑文』に「流沙」「而戻止」、「初めて大和尚に謁するの詩」に「而戻止」等、これに類似する表現がある。これによって、井上薫氏・関根真隆氏は、『国家珍

表1

<p>淡海三船「初謁大和尚二首并序」  <small>（『唐大和上東征伝』『延暦僧録』所収）</small>          玄奘「新訳経論等表」          唐・冥祥「大唐故三藏玄奘法師行状」巻末「誄」</p>	<p>序：開夫仏法東流、          詩：          暨乎          暨乎</p>	<p>摩騰入伊洛、真教南被、僧会遊於吳郡。          摩騰遊漢闕、僧会入 吳官。豈若真和尚、含章渡海。          摩騰入 洛、方被三川。僧会遊 吳、始霑荆楚。          摩騰入漢、教闡伊瀍。僧会遊 吳、義覃荆楚。</p>
--	--	--

淡海三船「初謁大和尚二首并序」 淡海三船「大安寺碑文」 光明皇太后「国家珍宝帳」願文 玄奘「進西域記表」	爰有 由是 声籠天竺、 沙門玄奘言、 蠅木幽陵、 雲官紀軒皇之壤、 涉流沙而遠到、 化及振旦、 流沙滄海、 夏載着伊堯之域、	鑑真大和上、 道律師、 澄心戒定、 超海賡而來遊、 法進闍梨、 凝神總持、 照智炬而戻止、 涉流沙而戻止、 凌滄海而遙來、
---	---	---

「宝帳」願文の起草者を淡海三船とされた。

では、光明皇太后もしくは淡海三船は、玄奘撰「西域記」を進めるの表をいずれの文献によつて参看したのか。

この上表文は、現存する『西域記』諸本にはみえず、『慈恩伝』巻六貞観二十年（六四六）七月乙未条、および玄奘の単行の文集である知恩院蔵・奈良朝古写経『大唐三蔵玄奘法師表啓』およびその異本である小泉策太郎氏蔵・唐経『寺沙門玄奘上表記』に収められている。京都帝大文科大蔵編『大唐西域記』「大唐西域記校刊発凡」は「恐ラクハ当日ノ真本ニ属ス」として、成立当初の『西域記』原撰本の巻頭には、この上表文があつた可能性を示唆する。

つまり、玄奘の「西域記」を進めるの表は「慈恩伝」・「表啓」「上表記」のほか、『大唐西域記』をふくめれば、玄奘関係の三種の文献に収録されていた可能性をもつ。したがつて、光明皇太后もしくは淡海三船が、いずれの書物を繙いたかという問題については確証を得ない。

これらをはじめとして、上代の仏教的な漢詩文には、出

張戒網而會臨、  
照智炬而戻止、  
法進闍梨、  
凝神總持、  
涉流沙而戻止、  
凌滄海而遙來、  
夏載着伊堯之域、

典として想定しうる文献が、複数存在するケースがしばしばみられる。そして、こうしたケースにおいては、あるひとつの書物を出典として特定することには、あまり意味がない。むしろ、こうした出典群・書物群が存在すること自体に意味を見いだし、その出典群の性格を把握することに意を注ぐべきではないか。

こうした出典のかたよりが顕著に認められるのが、玄奘やその後継者道宣にかかわる書物群である。

玄奘伝の影響を示す例に、『唐大和上東征伝』のほか、菩提僊那の弟子、大安寺僧修榮の撰になる『南天竺婆羅門僧正碑并序』がある。菩提僊那の「像贊」六篇と「序」から成るこの碑文には、玄奘伝「慈恩伝」の出典語が散見し、その構成は「慈恩伝」のダイジェストに相当する慧立の「論」の形式を踏襲している。

また、表3の「葉師寺東塔檉銘」は道宣の著作の影響を示す例である。

「葉師寺東塔檉銘」の出典は、道宣撰『広弘明集』巻二

「京師西明寺鍾銘并序 令製」	：瘡 群生於寬路、警庶類於迷塗、業擅香垣、功齊塵劫。式旌高躅、敢勒貞金・其銘曰、：声騰億劫、慶溢千齡。
「葉師寺東塔擦銘」	：道濟郡生、業伝 曠劫、式於高躅、敢勒貞金・其銘曰、：福崇億劫、慶溢萬齡。

八啓福篇に収める「京師西明寺鍾銘并序」である。『弘明集』撰者の道宣は西明寺の上座をつとめた当代有数の学僧で、鑑真もその法統につらなる南山律の祖。『弘明集』に皇太子の「令製」とあるものの、藤善真澄氏は「西明寺鍾銘并序」の起草者を道宣とみる。そしてこの場合もまた、「西明寺鍾銘」が『弘明集』によって伝来したとする説、道慈が手ずからもたらしたとする説があり、その伝来のルートに関しては決着をつけかねる現状にある。

注目されるのは鍾銘が存在した「京師西明寺」、すなわち、唐の長安・右街の延康坊西南隅にあった西明寺という寺院である。この西明寺こそは、玄奘が創建に深く関与し、そのあとを継いだ上座・道宣によって、律学をはじめとする教学が盛行し、奈良朝から平安朝にかけて入唐僧の憧憬をあつめた長安有数の学叢であった。

以上の例から知られるように、大安寺・東大寺・葉師寺・唐招提寺等とその周辺を場として成立した奈良朝の仏教的な漢詩文学作品の出典の多くには、玄奘・道宣の著作をはじめとする長安西明寺にかかわる文献に顕著なかたより

が認められる。ただし、その出典関係は複雑で、単一の書物の影響関係としては把握しきれず、述作者のもつ知的体系としてとらえるべき問題であると考ええる。

## 二 長安西明寺と大安寺文化圏

大安寺創建説話に、大安寺は長安西明寺の規模を模したという伝承があることから、両寺院の関係を論じた先学の研究も数多い。東大寺建立以前には国内最大規模を誇る官大寺であった大安寺は、官大寺としてのみならず、養老二年（七一八）十七年におよぶ入唐研学より帰朝し、天平元年（七二九）大安寺の平城京移建にあたった道慈によって、長安西明寺の総合的研究機構としての組織を継承したことが、ほぼつぎの六点にわたって指摘されている。

①三論・別三論・律・華嚴などの衆、すなわち諸宗の研究集団の存在。

②天平八年度の渡来僧、天竺僧菩提僊那・唐僧道璿、さらに新羅学生審祥ら学僧の止住。

③大安寺における渡来僧の止住は、西明寺の渡来僧受け

入れ機関として、一面で唐の鴻臚寺にも等しい性格を継承したことによる。<sup>(16)</sup>

④大安寺の経蔵は、西明寺の経蔵「菩提院東閣」を模した。<sup>(17)</sup>

⑤大安寺の巨大な僧坊は、『慈恩伝』巻十に「凡有十二院、屋四千余間」(大正蔵第五〇巻275c)、『仏祖統記』に「大殿十三所、楼台廊廡四千区」とある西明寺の長大な僧坊の影響を受けている。<sup>(18)</sup>

⑥鑑真将来とされる大安寺様式・唐招提寺様式とよばれる木彫の仏像様式が、唐招提寺と大安寺と薬師寺のほか、地方寺院にも伝播している。<sup>(19)</sup>

以上のように、大安寺の組織・機構というハード面が、長安西明寺の影響を受けていることは、ほぼ定説化している。しかしながら、西明寺の影響はハード面のみならず、教学、ひいてはそこで生まれた文学といったソフト面にもおよぶ。大安寺文化圏の文学は、西明寺創建に深く関与した玄奘、その後の西明寺を上座として継承した道宣をはじめとする長安西明寺の知的体系を積極的に導入している。

こうして想定したのが、大安寺文化圏という概念である。それは小島氏の説かれた「同じたぐいの高僧伝」とはいかなる書物群をさすのかという問題を「長安西明寺の知的体系」という概念でとらえなおそうとする試みでもある。

大安寺文化圏とは、第一に、長安西明寺の知的体系を受け継ぐ奈良朝漢詩文成立の場であり、第二に、これをささえる大安寺・東大寺を中心とした、在俗の仏教信者をもふくみこむ平城京諸寺院間の人的ネットワークとしておさえることが可能である。こうした奈良朝の漢詩文が『万葉集』とは位相を異にする仏教的漢詩文の世界を形成し、平安初期嵯峨朝漢詩文隆盛期へとつながってゆくのである。

### 三 長安西明寺の経蔵

長安西明寺の知的体系とは、いかなるものであったのか。大安寺の経蔵に影響を与えたとされる西明寺の経蔵の実態を、先学の研究に拠りつつ、概観しておく。<sup>(20)</sup>

『慈恩伝』によれば、玄奘が西域の旅から帰朝したのは、唐の貞観十九年(六四五)である。顕慶元年(六五六)八月十九日、高宗と則天武后の子、孝敬太子李弘の病氣平癒を祈願して、高宗は延康坊にあった太宗の第四子漢王李泰の故宅に仏教の寺院と道教の道観を建立する勅をくだし、実検にあたった玄奘の意向によって、その地には西明寺のみが造営された。顕慶三年(六五八)六月、高宗臨席のもと、西明寺では盛大な落慶法要が営まれる。しかし、翌顕慶四年十月、わずか一年三ヶ月で、玄奘は『大般若経』翻訳のために、学僧はじめ門徒らとともに玉華宮肅誠院にう

つり、その後の西明寺を領導することになったのは、西明寺上座の任にあった道宣であった。

道宣については、藤善真澄氏の詳細な研究がある。<sup>(21)</sup> 玄奘より六歳年上の道宣は、玄奘帰朝直後の貞観十九年（六四五）三月、玄奘の弘福寺での翻經に際して、文体の統一をはかる綴文の大徳九名のひとりとして『慈恩伝』巻六に「終南山豊徳寺沙門道宣」（大正藏第五〇巻353c）とその名がみえ、智昇撰『開元釈教録』巻八にはつぎのようにある。

其年五月、方操<sub>ニ</sub>貝葉、開<sub>ニ</sub>演梵文、創<sub>ニ</sub>訳<sub>ニ</sub>『大菩薩藏經』。沙門道宣執筆并刪<sub>ニ</sub>綴詞理。又復旁翻<sub>ニ</sub>『仏地經』。『六門陀羅尼經』『顕揚聖教論』。

（大正藏二二五四／第五五巻550b）

道宣はわずか一年あまりで弘福寺の訳場を去るが、その十二年後の顕慶三年（六五八）、西明寺の落慶にあたって、寺内の綱紀をつかさどる上座として迎えられた。

道宣撰『大唐内典録』巻十により、顕慶三年（六五八）道宣が七九九部三三六一巻におよぶ經典を西明寺に入蔵したことが知られる。

大東京師西明寺所写<sup>(22)</sup>正翻經律論集伝等<sup>(23)</sup>三年<sup>(24)</sup>顯慶。

入蔵正録合七百九十九部三千三百六十一巻<sup>(25)</sup>五万六千一百七十五紙<sup>(26)</sup>。  
（大正藏二二四九／第五五巻337c）

このことから、藤善氏は西明寺の創建にあたって、道宣がいち早く一切經を西明寺に搬入したことを指摘された。<sup>(27)</sup>

東大寺図書館蔵・尊勝院聖語藏の唐經『大方広仏華嚴經』（四十華嚴）の巻末に付された西明寺圓照の願文にはつぎのようであり、

大唐貞元十四年（一延曆十七年）歲在戊寅四月辛亥朔  
／翻經沙門圓照用<sub>ニ</sub>恩賜物<sub>一</sub>、手自写。／写<sub>ニ</sub>此新訳經<sub>一</sub>、  
填<sub>ニ</sub>統西明寺菩提院東閣／一切經闕本<sub>一</sub>。

堀池春峰氏は西明寺經藏とは、寺内にあった「菩提院東閣」とよばれる建物と推定された。<sup>(28)</sup>

道宣は西明寺創建の年に一切經をこの經藏に入蔵し、經藏の經營を直接手がけるとともに、収集した經論等の校閲や内容の検討にあたっている。『大唐内典録』巻十には、その撰述目的がつぎのように述べられており、

更參<sub>ニ</sub>祐・房等錄<sub>一</sub>、祐錄徵<sub>ニ</sub>據<sub>一</sub>、文義可<sub>ニ</sub>觀<sub>一</sub>。然大小雷同、三藏糅雜。抄集參正、伝記乱經、考括始終、莫<sub>レ</sub>能<sub>ニ</sub>通決<sub>一</sub>。房錄後出、該瞻<sub>ニ</sub>前聞<sub>一</sub>。然三宝共部、偽真淆乱。自余諸錄、胡可<sub>ニ</sub>勝言<sub>一</sub>。今余所<sub>レ</sub>撰、望<sub>ニ</sub>革<sub>ニ</sub>前弊<sub>一</sub>。

（大正藏二二四九／第五五巻338a）

現存最古の經典目録である梁・僧祐撰『出三藏記集』や、隋・費長房撰『歷代三宝紀』等の乱れを改めるためにこの書を選したという。藤善氏は、麟徳元年（六六四）正月に

道宣が編纂した『大唐内典録』はそこから生まれた副産物とみる。西明寺経蔵には、道宣が編纂した『大唐内典録』に記載される經典が収められ、のちのちまで補充されて、唐の仏教復興の中心的役割をになってゆくことになる。

一方、道慈の将来經典には西明寺・薦福寺で新訳された義浄の新訳經典があり、道慈が西明寺経蔵を利用した根拠とみなされている。

養老二年（七二八）十月の道慈の帰朝から『日本書紀』成立の同四年（七二〇）までのあいだに成立した『日本書紀』仏教伝来記事には、『梁高僧伝』仏図澄・康僧会伝のほか、義浄が西明寺で翻訳した新訳『金光明最勝王經』を典拠とする道慈の潤色が指摘されている。同三年（七一九）道慈と神叡に対する『続日本紀』詔には『梁高僧伝』に立伝され、『論』に掲出される仏図澄・鳩摩羅什・道安・慧遠の名が引かれ、神龜二年（七二五）から神龜年間（七二八）の正月に成った『懷風藻』道慈の詩序には、小島氏の指摘のように道宣撰『続高僧伝』からの出典語があった。

道慈が西明寺に滞在したことを示す確かな史料は得られないが、その蓋然性は高く、これら道慈に関係する文献には、道慈がもたらした西明寺の知的体系が反映していると考えられる。

道慈は、西明寺経蔵の經典をいかにして入手したのか。

史料を欠くため推測の域をでないが、道慈が入唐した大宝元年（七〇一）をさかのぼること三十八年、道宣撰『弘明集』三本・宮本の異文、卷十二弁惑篇第二之八に収める明概「決対傳突廢佛法僧事并表」の奥書が参考になる。

竜朔三年（六六三）七月十九日、長安令清河公李義節、於西明寺、索『破邪論』。往光明寺経坊所、立抄演訖、以其月二十一日進了。

（大正蔵二一〇三／第五二卷175c）

藤善氏は高麗本系にないこの異文に着目、この奥書を道宣のものとした。さらに、唐代の新訳經典の標準テキストを三百六十州に配布するため、長安宮廷内に写経司が置かれ、検校写経使のもとに多くの写経生が配されて、彼らが抄写した一部ないし数部の写経が各州に送付され、これにもとづいて各地で写経がおこなわれた実態を踏まえて、この奥書をつぎのように解された。

道宣自身が『破邪論』を絶賛して、「家ごとに一本を蔵し、心より口誦を成す」と述べながら、肝心の西明寺経蔵になく光明寺の経蔵から借りたとするのは解しかねる。おそらく西明寺経蔵の『破邪論』を携えて、西明寺の延康坊とは西隣の懷遠坊にある光明寺に行き、抄写してもらい、長安令の李義節に進呈した、という

意味であつて、経蔵ではなく、経坊と作るのも、そのためであろう。更なる検討を必要とするが、光明寺のちの大雲経寺に写経所があり、写経生が配置されていたと想定しておきたい。その折を好機として、李義節とは別に一部を抄写させ末尾に加えたのが、この奥書ではなかつたかと思う。

西明寺で経典をもとめ、これを光明寺経坊所に持参して抄写するという状況は、おそらく、道慈以下の入唐僧の場合も、ほぼ同様であつたらう。かれらは西明寺の一切経蔵と目される「菩提院東閣」から経典を借り出し、光明寺の経坊所のような官設、あるいは私設の写経所でこれを写し取らせ、日本へと将来したものと推測される。

#### 四 長安西明寺の学僧とその著作

西明寺の知的体系を形成するのは、西明寺に住した学僧であり、かれらのものした著作である。玄奘・道宣が活躍したころの西明寺には、どのような学匠がいたのか。

『慈恩伝』巻十によれば、西明寺の落慶なるや、五十名の大徳と各々侍者一名をえらんで西明寺に住ませ、百五十名の童子を新たに得度させ、七月十四日には僧侶等が西明寺に入寺した。

勅先委<sub>二</sub>所司<sub>一</sub>簡<sub>二</sub>大徳五十人侍者各一人<sub>一</sub>。後更令<sub>レ</sub>詮<sub>二</sub>

試業行<sub>レ</sub>童子一百五十人擬<sub>レ</sub>度。至<sub>二</sub>其月十三日<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>寺建<sub>レ</sub>齋度<sub>レ</sub>僧。命<sub>二</sub>法師<sub>一</sub>看<sub>レ</sub>度。至<sub>二</sub>秋七月十四日<sub>一</sub>、迎<sub>レ</sub>僧入<sub>レ</sub>寺。(大正蔵ノ第五〇巻27c)

このとき選ばれた五十名の大徳の名はつまびらかでないが、道宣・神泰・懷素・道世・圓測・玄則・惠立・静之・法雲ら、名だたる学僧がふくまれていた。

西明寺創建時の三綱は、従来、『仏祖統記』巻三九「道宣律師為上座、神泰法師為寺主、懷素為維那」によつて道宣・神泰・懷素とするのが通説であつたが、蘇頌撰『唐長安西明寺塔碑』に道宣・神察・智衍・子立・玄則・静之・道成・懷素等八名の名があげられ、

時立<sub>二</sub>威儀・行則<sub>一</sub>、上首<sub>レ</sub>拳<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>左臂<sub>一</sub>者<sub>上</sub>。上座道宣、寺主神察、都維那智衍・子立、傳学<sub>レ</sub>玄則、棲禪<sub>レ</sub>静定、持律道成・懷素等八法師。

(『文苑榮華』八五五、『全唐文』二五七)

『阿毗達磨大毘婆沙論』(大正蔵一五四五ノ第二七卷)巻一末尾の訳場列位に「大慈恩寺沙門神泰証義」、道宣撰『大唐内典録』巻十「歴代衆經感興敬録」、『集神州三宝感通録』巻下に「京師西明寺主神察、目驗説之」とあることから、藤善氏は西明寺の寺主は神泰ではなく、神察とされる。

「長安西明寺の知的体系」とは、本稿で触れた玄奘(六



〇二（六六四）の訳出經典七六部一三四七卷、西明寺上座道宣（五九六く六六七）の著作三五部一八八卷、道世（？く六八三）の著作十二部一五六卷のほか、これら西明寺の学僧、さらにはその法統につらなる弟子たちの教学や著作をも視野にいれるべきものである。

ここでは、道宣と関係のふかい道世に着目する。道世と玄暉は、『日本靈異記』下巻三八縁に引かれる「諸教要集」にも比定され、影響が指摘されている『諸經要集』『法苑珠林』の撰者であり、また、道宣の受戒阿闍梨・智首の門下で、道宣とは兄弟弟子にあたる。道世もまた、玄奘の訳場につらなり、のち西明寺に迎えられ、道宣とともに西明寺に住することになった。

藤善氏は『諸經要集』はもちろん『法苑珠林』も、西明寺菩提院の一切経を読んで撰述編纂されたとし、道宣撰『大唐内典録』が西明寺の経蔵管理の副産物であったと同様、道世撰『諸經要集』『法苑珠林』もまた、西明寺の一切経入蔵によって成立したと論じられた<sup>31)</sup>。

西明寺の学匠道宣・道世の著作が、西明寺経蔵の一切経を共通基盤とすることに注目したい。小島氏が想定された「同じたぐいの高僧伝」とは、西明寺経蔵を共通母胎とする知的体系に淵源があった。道宣・道世等の著述の方法が、奈良朝の仏教的漢詩文に典拠のかたよりをもたらしただので

ある。

第一に、道宣と道世の著作には、きわめて密接な関係がある。

藤善氏は、道宣の『集神州三宝感通録』（以下「感通録」と略称）の内容の多くが、道世の『法苑珠林』に抄出され、完全に同文もみえること、また、「感通録」の末尾にはつぎのようにあり、

予以麟徳元年夏六月二十日、於終南山北、鄼陰之清官精舍、集之。素有風氣之疾、兼以從心之年、恐奄忽茲露、靈感沈没、遂力疾出之。直筆而疏、頗存大略而已。庶後有勝事、復寄導於吾賢乎。其余不尽者、統在西明寺道律師新撰『法苑珠林』百卷内、具顯之矣。  
(大正蔵二一〇六／第五二卷435a)

道宣が『感通録』で意を尽くせなかつた部分は、すべて道世が新たに撰する『法苑珠林』百巻に託すことを明記していることを指摘された。つまり、道宣は、道世が執筆を進めていた『法苑珠林』の内容を熟知していたのであり、道宣と道世は原史料を共有していたのである。

こうした資料の共有・提供という方法が、ある文献とある文献のあいだに共通する出典語を生みだし、「体系」とよびうるほどの緊密な関係をもたらしことになったと考えられる。このことは、上代の仏教的漢詩文作品のみなら

ず、『諸経要集』『法苑珠林』と『日本靈異記』の関係を考えるうえで重要である。

第二に、道宣はみずからの著作に対して、律書の重修や『統高僧伝』の追補など、貪欲なまでに加筆補正をくり返している。道世もまた同様に、『諸経要集』を増補して『法苑珠林』を編纂している。『諸経要集』卷十三宝部第一・普敵述意縁第一「論」と、『法苑珠林』卷十三敵仏篇第六念仏部第二の「論」が完全に一致するなど、藤善氏が指摘されている。

こうした道宣・道世の著述の態度は、かれらに固有のものではない。表1にあげた玄奘伝の場合も、『行状』『誄』が、原史料である玄奘撰「新訳経論等を進るの表」を『慈恩伝』と共有した結果、生まれた「同じたぐいの高僧伝」とみなしうる。

一方、八世紀末の大安寺文化圏を代表する鑑真伝三部作にも同じ傾向が認められる。

思託撰『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』（『広伝』）

天平宝字七年（七六三）～宝亀二年（七七二）

淡海三船撰『唐大和上東征伝』

宝亀十年（七七九）二月八日

思託撰『延暦僧録』第一「高僧沙門釈鑑真伝」

延暦七年（七八八）二月四日

これら三部の鑑真伝撰述に密接にかかわる渡來僧思託は、鑑真に従って來朝した唐僧であり、『延暦僧録』第一に収める自伝「從高僧沙門釈思託伝」にはつぎのようにある。

思託述『和上行記』、兼請淡海真人元開、述『和上東行伝箋』。則揚千徳、流芳後昆。

思託はみずから『和上行記』すなわち『広伝』を撰述するとともに、淡海三船に『和上東行伝箋』すなわち『唐大和上東征伝』の述作を依頼した。そこには当然、思託から三船へ史料の提供があつたはずである。さらに『延暦僧録』「高僧沙門釈鑑真伝」において、三たび鑑真伝を手がける思託には、道宣・道世にも通じる自著の重修加筆への執拗なまでのこだわりを看取することができよう。つまり、鑑真伝三部作は、思託が掌握する原史料を共通母胎とし、再三にわたって補筆重修の手を加えられた過程を示すものでもある。

「同じたぐいの高僧伝」、そして「長安西明寺の知的体系」「大安寺文化圏の出版体系」とは、西明寺の道宣・道世、渡來僧思託等に見られる唐の学僧の著述の方法・態度によって生じた現象であり、かれらのあいだでの史料の共有と提供、自著に対するねばり強い推敲補筆によって生みだされたのである。



平安初期の漢詩文と仏教を代表する空海と最澄もまた、  
図1および表2の出典関係により大安寺の系譜につらなる。

平城京から長岡京を経て、平安遷都へと移行するなかで、  
歴史の舞台が決定的に異なり、ひとつの画期をなすとはい  
え、最澄・空海が存在は、文学史のうえでは、上代の漢詩  
文が中古の漢詩文とひとつづきの系譜として連なることを  
意味する。平安初期の嵯峨朝の文学が、「国風暗黒時代」  
「唐風謳歌時代」と称されるのは、『万葉集』の存在があ  
まりにも偉大であり、これに震んで上代の漢詩文が文学史  
のうえに明確に定位されてこなかったためであろう。国家  
仏教の隆盛のもと、平城京の時代から夙に唐風謳歌の時代  
は存在したのであり、長安西明寺を淵源とする大安寺文化  
圏の漢詩文は、空海・最澄を経て、平安初期嵯峨朝の漢詩  
文へとひとすじにつながっていくのである。

注

- (1) 小島憲之『上代日本文学与中国文学 上中下』（昭和  
三七・三九・四〇年、塙書房）
- (2) 中西進『万葉集の比較文学的研究』（昭和三八年、南  
雲堂桜楓社）
- (3) 辰巳正明『万葉集と中国文学』（昭和六二年、笠間書  
院）
- (4) 小島憲之『「懐風藻」仏家伝を考える』（『漢語逍遙』

平成一〇年、岩波書店。初出平成元年）

- (5) 井上薫「国家珍宝帳と大唐西域記の關係」（田村円澄  
先生古稀記念会編『東アジアと日本』考古・美術編、昭  
和六二年、吉川弘文館。「流沙を渉り来唐・来日した菩  
提懼那」「靈山寺と菩提僧正記念論集」昭和六三年、大  
本山靈山寺）。関根真隆「国家珍宝帳と最澄願文の係わ  
りをめぐって」（高島正人先生古稀祝賀論文集『日本古  
代史叢考』平成六年、雄山閣出版）
- (6) 京都帝大文科大書編『大唐西域記』（復刻版、国書刊  
行会。明治四四年初版）
- (7) 藏中進「思託——渡来僧の生涯と文学——」（『唐大和上  
東征伝の研究』昭和五一年、桜楓社）
- (8) 拙稿「奈良朝漢詩文における女奘三藏伝の受容につい  
て——長安西明寺と漢詩文述作の場・大安寺」（『東洋研  
究』一一〇、平成八年、大東文化大学東洋研究所）
- (9) 藤善真澄「薬師寺東塔の擦銘と西明寺鍾銘」（『道宣伝  
の研究』平成一四年五月、京都大学学術出版会。初出平  
成一一年）
- (10) 平子鐸嶺「薬師寺東塔の擦の銘について」（『仏教芸術  
の研究』大正三年、金港堂。初出明治三八年）
- (11) 注(9)の前掲論文。
- (12) 堀池春峰「入唐留学僧と長安・西明寺」（『南都仏教史の  
研究 下 諸寺篇』、昭和五五年、法藏館。初出昭和五  
一年）
- (13) 同右。

- (14) 同右。
- (15) 同右。
- (16) 注(9)の前掲論文。
- (17) 注(12)の前掲論文。
- (18) 杉山二郎『大仏以後』(昭和六年、学生社)
- (19) 毛利久「唐招提寺彫刻の問題點」(奈良六大寺大觀第十三卷 唐招提寺)昭和四七年、岩波書店。安藤更生「鑿真大和上伝の研究」(昭和三五年、平凡社)。太田博太郎「大安寺の歴史」田辺三郎助「十一面觀音菩薩立像」(『大和古寺大觀』第三卷、昭和五二年、岩波書店)。井上一稔「天平の仏たち」『解説』(奈良国立博物館特別展『天平』図録、平成一〇年)
- (20) 古田紹欽「長安西明寺放」(『仏教研究』四一一)。小野勝年「長安の西明寺とわが入唐僧」(『仏教芸術』二九、同)『中国隋唐長安寺院史料集成』解説篇、〇九五・一四六〜五六頁)。堀池春峰、注(12)の前掲論文。馬得志「唐長安城発掘新収獲」(『考古』昭和六二年五期)
- (21) 藤善真澄『道宣伝の研究』(平成一四年、京都大学学術出版会)
- (22) 藤善真澄「晩年の道宣」、注(21)の前掲書。
- (23) 注(12)の前掲論文。
- (24) 注(22)の前掲論文。
- (25) 井上薫「日本書紀仏教伝来記載考」(『道慈』(『日本古代の政治と宗教』昭和三六年、吉川弘文館))
- (26) 同右。
- (27) 拙稿「わが国初期僧伝の彫琢―大安寺における漢文伝述作と『梁高僧伝』―」(『仏教文学』一九、平成七年、仏教文学会)。「わが国初期僧伝の基盤―『梁高僧伝』「論」一贊の受容―」(『東洋研究』一一六、平成七年、大東文化大学東洋研究所)
- (28) 注(12)の前掲論文。
- (29) 藤枝晃「敦煌出土の長安宮廷写経」(『塚本博士頌寿記念 仏教史学論集』昭和三六年)
- (30) 注(22)の前掲論文。
- (31) 同右。
- (32) 藏中進「思託―一渡來僧の生涯と文学」(『唐大和上東征伝』と『延暦僧録』(『唐大和上東征伝の研究』一九六七年、桜楓社)。拙稿「延暦僧録」注釈(二)解題篇」(『池坊短期大学紀要』二三、一九九三年三月)。山本幸男「早良親王と淡海三船―奈良末期の大安寺をめぐる人々―」(『高野山大学密教文化研究紀要』別冊1、一九九九年一月)
- (33) 大安寺盧舎那大仏造営と『華嚴經』書写の事実を初めて指摘したのは、家永三郎「東大寺大仏の仏身をめぐる諸問題」(『上代仏教思想史研究』昭和一七年、畝傍書房。新訂版昭和四一年。初出昭和一三年)である。ついで、福山敏男「大安寺華嚴院と宇治華嚴院」(『日本建築史研究』続編)昭和四六年、墨水書房。初出昭和一四年)は大安寺盧舎那仏が画像であり、脇侍として千手觀音と不

空窠索観音の両画像も作成されていたこと、これと並行して天平感宝元年（七四九）閏五月から六月にかけて「大寺花厳」「大安寺花厳」とよばれる『華厳経』写経が造東大寺司写経所から派遣された経師によって書写されたことをあきらかにされた。さらに、堀池春峰「華厳経講説よりみた良弁と審祥」（『南都仏教史の研究 上 東大寺篇』昭和五五年、法蔵館。初出昭和四八年）は「大寺花厳」「大安寺花厳」がこの大仏画像の開眼供養のための写経であることを明言し、渡辺晃宏「天平感宝元（七四九）年大安寺における花厳経書写について」（『日本史研究』二七八、昭和六〇年）は、皆川完一「平城京東市図」（『書の日本史一』昭和五〇年、平凡社）が指摘した「大安寺華厳」と同じ天平感宝元年閏五月におこなわれた十部『八十華厳』書写が、この「大安寺華厳」に相当することを指摘し、その写経事業全体の経緯をあきらかにされた。

拙稿「もうひとつの盧舎那大仏―石川年足・慈訓と石川垣守・道璿と大安寺文化圏―」（梶川信行編『万葉人の表現とその環境―異文化への眼差し』日本大学文理学部叢書1、平成一三年、富山房）

- (34) 拙稿『南天竺婆羅門僧正碑并序』と入竺求法高僧伝―『梁高僧伝』『訳経』篇の受容と大安寺の華厳教学―（『東洋研究』一一二、平成六年、大東文化大学東洋研究所）

(35) 関根真隆、注（5）の前掲論文。